

海老原宏美さん 寄稿

表題は中日新聞 2 月 25 日朝刊。リードから — 相模原市の障害者施設で昨年 7 月、入所者 19 人が刺殺されるなどした事件で、元職員植末 聖^{さとし} 被告(27)の起訴を受け、難病による重度障害を自ら抱えつつ東京都内で障害者の自立を支える海老原宏美さん(39) = 東大和市 = が、本紙に寄稿した。「重度障害者は、社会に『価値とは何か』を問い続ける存在」と訴える。

事件を知った時、被害に遭われた方々の恐怖と無念を思えばどこまでも気持ちが沈んだ。けれど、事件が起きたことに対して大きな衝撃を感じなかった。

障害者は生まれた瞬間から差別されている。「社会に必要ない」「周りに迷惑をかけるだけ」「生きていてもかわいそう」と、常に排除、隔離、区別されていると思うからだ。働いて税金を納める。そんな「健全な」人間を産み育てられるような「生産性」こそが社会貢献だとする。そして、より貢献している人間に、より分配されるべきだという「分配原則」。それらが障害者差別の社会的価値観をつくる。

貢献率の低い重度障害者を切り捨てれば、次は高齢者が貢献していない存在になる。高齢者を切り捨てれば次は病弱者…。どんなに切り捨てても、また新たな社会的弱者が生まれる。切り捨てた側の人間も、「次は自分が切り捨てられるのでは？」と、おびえる。常に社会の顔色ばかり気にして、自分らしさを出せずにとんどん追い詰められていくに違いない。

人の価値というのはどのように決まるのか。私は、「価値のある人間と価値のない人間」という区別や優劣があるとは思っていない。ただの木にすぎない縄文杉を見て感動できるのは、人の心が価値を創り出しているからだ。

価値を創り出すという能力は、唯一、人間にのみ与えられている。そう考えるとき、ただそこに静かに存在するだけの人間にその尊厳を見いだすことも、人間だからこそできるはずだ。

それができなくなった時、相模原であったような悲惨な事件が起こってしまうのではないだろうか。存在するだけで社会に「価値とは何か」を問い続ける。そんな重度障害者は、存在しているだけで社会に大きく貢献しているとは言えないだろうか。



相模原市の事件を受け、寄稿した海老原宏美さん

やまゆり園の事件の被告が、19人の尊い命を奪った罪は大きい。しかし、これを「特殊な人間が起こした特殊な事件」「えたいのしれない人間は隔離すべきだ」と片付けてしまっただけでは、社会が重度障害者に何の価値をも見いだそうとせず、施設や病院に押しやっけてしまっているのと同じではないだろうか。

(newborn前診断で染色体異常が確定した) 障害胎児の 95%近い中絶率を容認する現状は、被告の主張とも共通する価値観から来ていないだろうか。今こそ自分たちの価値観と向き合い、この事件を自分事として引き受ける必要があると思う。

海老原宏美さんは、脊髄性筋萎縮症で人工呼吸器を 24 時間使って自立生活を送る。NPO 法人「自立生活センター東大和」で障害者の権利擁護活動に励む。映画「風は生きよという」(2015 年製作)に出演。

最初は一部だけ紹介するつもりが、海老原さんの「言葉」に引き寄せられて、全文を書き写してしまった。映画などで海老原さんに会えることを楽しみにしたい。

(2017年3月3日)